

ゼームス坂物語
PART 1

木立ちは緑なり

高尾五郎

草の葉ライブラリー

ゼームス坂物語
PART 1

木立ちは緑なり

一九九三年十一月二五日初版発行

著者 高尾五郎

制作 井上美穂子／久門伸光／瀧井雄一／宮崎早苗／和田誠

発行所 森の学校

長野県東筑摩郡明科町東川手池桜 郵便番号三九九一七一

振替〇〇一五〇一二一七五九四九一

印刷製本 成徳

草の葉ライブラリー 2

ゼームス坂物語
PART 1

木立ちは緑なり

高尾五郎

草の葉

ゼームス坂物語
PART 1

木立ちは緑なり

目次

大介の朝 7

君は素敵なレディになれる 39

オランダ運河のタカシ通り 73

白紙 105

人生のデビュー 139

櫛の木子供団 171

木立ちは緑なり 207

雨の遠征 243

七日間のキャンプ 277



大介の朝

ゼームス坂の中腹から階段をおりて、ごちゃごちゃと家がたてこむ裏通りに入ったところに汚れた四階立てのビルがあり、その二階に「是枝夢巢塾」はあった。小さな部屋で子供が二十人も入ればいっぱいというところだった。部屋の片隅には蝶の標本が山と積まれてあった。

その塾はあまりこの地域では評判はよくなかった。あんなところに入れても成績はちっともよくならないとか、勉強よりも遊ぶことが大切といって遊ぶことに力をいれたり、自然観察とかいって丹沢とか秩父の山にしょっちゅう出かけたり、その先生は蝶にくるっていて奥さんに逃げられたとか、その先生の名は多川長太というのだが、あれは蝶太がふさわしいとか。

その地区にある学校の先生たちの評価はもう最悪だった。先生たちのなかにはその塾の名前をきくだけで、口にとびこんできたゴキブリをグチャリとかみつぶしてしまったといった表情になるのだ。先生たちにそんな反応をおこさせるのは、ある子供の通信表を、あんたの評価はまちがっている、教師の前で引き裂いてしまったというおそるべき事件を引き起こしたらくでもない人物が教えている塾だという印象があるからだった。

それは事実だった。事件はこういうことだったのである。

新学期がはじまってまもない日だった。是枝夢巢塾のドアがたたかれて、ちよつとこぶとりの母親と、にこにこしている子供が入ってきた。外はだいぶ激しい雨だったようで、傘からぼたぼたと水滴が落ちていた。その傘をどうすべきか母親の方が迷っていた。

「ああ、傘はそのバケツのなかにつつこんで置いて下さい」
すると男の子は、ははははと笑って、

「バケツだって、貧乏なんだ、ここ」

と言ったのだ。母親にこれとたしなめられていたが、長太は、

「なかなか君の直観は鋭いじゃないか。名前はなんていうの」

それが大介と時子だったのだ。

時子は椅子にすわると、なにやらたまっていたものを吐き出すように喋りだした。

「主人は長距離の運転手をしていまして、会社にくくと三日間はもどってこないんです。あたしもまた工場に出ていましてね。吹けば飛ぶような小さな工場ですが、結婚前からずうっとお世話になっていまして。ですから大介が生れても、大介を赤ちゃんのときから保育園にあずけたりして、もうほったらかしだったんですよ。普通のおかあさんのようなことはしてあげられなかったんですけど、でもこの子はこの子なりに丈夫に育ちましてね……」

時子はながながと大介が生れたときからのことを話しはじめた。時子のかたわらで神妙にすわっていた大介は、次第にじりじりしてくるようだった。

「大介だっけ。ちょっと悪いけどさ。お母さんと話しがあるからさ、そのトイレを掃除してくれないかな」

「え、トイレ」

「そうだよ。トイレ掃除は男をきたえるんだ」

「そういうことわざないと思っただけ」

「現代ことわざ辞典にちゃんとのっているよ」

「そうかな」

「そうだよ。だからちょっとやってくれよ」

大介はさらににこにここと笑って、いいよと言って掃除をはじめたのだった。時子はおかしそうにころころと笑った。その笑いが底ぬけに明るく、長太までほのぼのとさせるのだった。

「ただ一つ困るのは勉強なんです。学校の先生にもよく言われるのですが、けっして頭は悪くない、ただ勉強するという習慣ができていないって。だから家庭でも二十分でも三十分でもいいから、勉強する習慣をつくって下さいと言われるんですね。そんなわけであたしがみてやらないければと思って、何度かやってみるんですが、だめなんです。まったくだらしがない親ですから、最初にいやになってしまふのは親の方なんです。疲れてるなんて言っちゃいけないんですけど、あたしのほうが眠くなっちゃうんですよ」

「ははは。なるほど」

「それに最近ほ教えようと思っても、もうあたしにわかりませんからね」

「そうですね」

「そこでいろんな塾にあずけてみたんですが、一週間もたないんですね、これが。なんかこの子にはまるで勉強しようという気がわいてこないんです。学校で勉強しているんだから、学校が終わったら勉強のことはいいのっていう調子なんですから。それはそれでいいと思うのですね。

そのために学校というものがあるんですから。親がもともと勉強しなかった人間ですから、勉強のできる子になれなんて無理な注文をだせるわけがありません。でもいまは昔とちがいますから

ね。少なくとも高校ぐらいは出なければ本人が困ると思うのです。ですから最低の学力というんですか、読んだり、書いたり、計算したりする力というものはきちんとつけておいてもらいたいと思うんです」

時子は心のなかからわき立ってくるものがあるのか話しは切れ目なかった。なにか大介に関することはなんでも話しておきたいとでもいうように。それは彼女の意識しない無意識の領域というものが、彼女のきたるべき運命というものを予感していたのかもしれない。学歴だって中学しかでない口ぶりだった。しかし彼女の内部からあふれてくるものにある高貴さというものがあるように長太には思えた。彼女はしっかりとわが子をくもりのない目でみている。なにか時子は生きることの本当の意味を知っているようにみえたのだ。

最近長太はこの世に二種類のお母さんたちがいると思うようになっていた。その一つがいわゆる教育ママといわれる人種だった。この世に横行する偏差値という価値観のなかにどっぷりとつかって、そこからありとあらゆるものをみていく母親たちだ。長太がもっとも嫌いなタイプの人たちだった。

そしてもう一種類が、そういった価値観からおりてしまっている母親たちだった。いまでもわずかだがこういう母親は存在するのだ。

時子はその訴えるようなお喋りをやめると、

「こんな成績の子でもみていただけるんでしょうか」

「学校の成績っていうのはすぐには上がらないものですよ。塾に入れば成績が上がるなんていうのはまったくの幻想ですね。そんなことをぼくは保証しません。上がらない子は何年たっても上がらないものです」

と長太はそっけなく言った。それは長年子供たちをみてきた結論だった。通信表に一とか二とかならんでいる子が、三とか四に上がることはほとんど不可能なことだった。いつも二十点とか三十点しかとれない子は、どこまでいってもその程度の点数しかとれない。したがってそういう子の評価はまったく別の尺度が必要になるといったことを説明していると、時子は長太の言わんとすることをすべて見通しているかのようにこう言った。

「大介は目にみえない力が欠けているんですね。その目にみえない力をつけることだと思っんですが。そこをところをつけていただければいいと思っています。先生のおっしゃるように成績なんてどうでもいいと思っています」

「それでしたら、ぼくからお願いますよ。なんだかとても面白い子だな。面白い子っていまあんまりいないんですよ。名前がいいな。大介っていう名前が。いまはほんとうにけちくさい子供ばかりですからね」

時子が帰ったあとも大介はごしごしと一生懸命にトイレ掃除を続けていた。そしてその掃除が面白くなったのか、部屋の方まで箒ではきはじめるのだ。

「そこはもういいよ。なかなかきれいになったね」

「うん」

「うん、じゃなくて、はい、だろう」

「まあ、そうです」

「じゃあ、これから作文を書いてもらうぞ。入学試験みたいなものだよ。原稿用紙十枚書いてくれよ」

「うへっ」

いままで原稿用紙一枚書くのもやっとだったにちがいない。だから十枚なんてとんでもないよと抗議しているようにみえた。長太はそんな大介の前にばさりと原稿用紙をおいて、黒板に、

〈ぼくの好きなテレビ〉

〈ぼくがいま熱中していること〉

〈ぼくの夢〉

〈ぼくの家族〉

といったテーマを次々に書いていった。

このとき大介はいままでにない体験をするのだった。そのテーマに大介は次々と食らいついていくのだ。しんとした部屋のなかでさらさらと鉛筆を走らせる音だけが響く。どんどん時間がたっていた。どんどん原稿の升が埋まっていく。五枚目に入ったところで力尽きた。もてるものをすべて放出したといわんばかりなのだ。

「なかなかないぞ。なかなかない作文だよ。ひらがなばかりというのもいいな。君の字も素敵だ。のびのびとしていて気持ちのいい字だよ」

それはまったく見事なほどひらがなのオンパレードだった。それにずいぶん幼稚な作文だった。しかし彼がいま一番熱中している釣りのことを書いたあたりになると、言葉がきらきらとひかっているのだった。

こうして大介は是枝夢巢塾の生徒になった。

大介の小学校は五段階評価をとっていた。大介の成績はというと、一と二が見事なほど交互にならんでいるのだが、驚くことに体育だけに五がついていた。こういう子供ってなかなかいないのだ。このことだけで長太はその子を尊敬してしまう。

しかし大介を教えてみると、彼の学力だって通信表につけられたようなものではないことにすぐに気づくのがだった。算数のちょっとひねった応用問題もヒントをあたえたとたちまち解いてしまふし、国語だって大きな声でしっかりと読みあげていくことができる。要するにテストに良い点がとれないだけなのだ。

一学期が終わった日、大介は成績表をなんだがうれしそうにもってきた。算数と理科とそれに美術も上がっていた。べつに長太の教え方がうまいわけではなかった。むしろ長太はなるべく教えないようにしている。それが長太の方針だった。勉強ができるできないの別れ目は、その子が目の前に横たわるさまざまな問題の山を、どれだけ自分の力で解いていけるかどうかにあるのだ。その山をあきらめずに乗り切っていく子供だけが成績を上げていくことができる。そういう子供に長太はしたいのだった。

「よくがんばったね。もともと大介って力があるわけだから。これでわかっただろう。やればで

きるんだってことがき。こんどはオール三だね」

「それはちょっと悪いジョークだな」

「悪いジョークなのかな。ぼくはそう思わないけど。大介はできるんだからさ。もともと力があるんだよ」

「いまの子供ってそういうおだてには乗らないのって」

と大介はへらず口をたたいたが、まんざらでもないようだった。

しかし二学期になると、ちょっと息が切れたのか大介はちょいちょい休むようになったし、それに塾にきても前のようなひたむきさというものがなくなっていた。投げやりでさっぱり集中しなくて、そんなとき長太はやる気がないなら帰っていいよと雷を落とすのだった。

そんなことが続いてとうとう大介は姿をみせなくなった。そんなとき以前の長太なら電話を入れてどうしたのとたずねるのだが、もう最近ではそんなことをしなくなっていた。出てこない子にはそれなりの理由があるのであって、それでその子との絆が切れたって仕方がなかった。ただそれだけの関係だったと思うのだった。しかし大介の休みは長太にはとても気になって何度も電話をくれたが、さっぱりつかまらない。父親は始終家をあけていることを知っていたが、時子もつかまらない。

長太は大介が好きだった。というよりも大介を尊敬しているのだった。大人が子供を尊敬するなんておかしい話しだが、尊敬に値する子供ってちゃんというのだ。大介は長太をしきりに刺激するのだった。大介のなかに横たわっている大きな可能性が。それに大介は笑顔のきれいな子だ